

★左回りで未来を刻む —ボリビア ラパスからの報告

森川泰明（大阪AALA常任理事）



国会議事堂の左回りの時計

逆回りの時計

ボリビアの国会議事堂の大時計の針は左に回る。文字盤の数字の並びも左回りだ。強い主張を感じる。

私たちが使う時計が右回りである起源は、地面に立てた日時計の棒の影が、太陽の動きに従って左から右へと右回りに動くことにある。しかし太陽が北を通る南半球では、日時計の影は右から左へと動く。

2014年6月の冬至（北半球の夏至）に、ボリビア国会議事堂の大時計は回転を変えた。

マルセロ・エリオ下院議長は、「北半球における不公平を、南半球に出現するであろう新たな世界秩序によって終わらせる必要があることを、新時計の導入を通じて提起したい。」と説明し、ダビー・チョケワンカ外相は、新しい時計には「われわれのアイデンティティを回復する時が来たことを示す狙いがある。」と明かした。

自らにふさわしい発展の道を歩むことを宣言し、北半球の先進国の発展の方法に追随することへの決別宣言だ。直感に働きかけるアピールは国民にもわかりやすい。国民に自由な発想と行動を保障するにとどまらず、自分の頭で考え行動することが幸福に生きるために重要であることを示唆している。



ラパスの公共交通機関 ミ・テレフェリコ

空中都市交通

高地にあるから空中というわけではない。ミ・テレフェリコと呼ばれるロープウェイは、ラパスの景観を際立たせている。ミ・テレフェリコは、標高三六〇〇メートルのすり鉢状のラパスの中心から標高四〇〇〇メートルのすり鉢のふちにおよぶ。

酸素が薄いのでガソリンの燃焼効率が悪いことに加えて、坂が多いため車がアクセルをふかすことと、空気が澁みやすい地形であることとの相乗効果で排気ガスが滞留しやすい。ラパスの大通は息苦しい。ミ・テレフェリコは大気汚染問題の解決策にも効果的だろう。

二〇一四年の導入以来、六路線が営業している。十人乗り客車（ゴンドラ）は、路線ごとに色が異なり目を楽しませる。二〇二〇年、完成時の総延長は三三キロ、十一路線、三九駅となる。日本の地下鉄では福岡市地下鉄の営業キロが三〇キロ、三路線、三五駅でほぼ同規模だ。六〇〇〇メートル級の山々を眺めながらの乗車は、気分を明るくさせる。暗闇を走る地下鉄とはまったく趣が異なる。

北半球の都市とは異なった発展のしかただ。



ミ・テレフェリコ路線図 現在は六路線開業

魔女通り

かつてスペインの植民地だったボリビアの公用語はスペイン語だ。しかし古来から受け継がれた先住民の生活様式は継承されている。国民の多くはケチュア語、アイマラ語といった先住民の言語を使う。モラレス現大統領は、ボリビア初の先住民大統領でアイマラ人だ。



リヤマの子のミイラが吊られる店の店頭

街の中心部の、通称魔女通りと呼ばれる一画には儀式用品を売る店が軒を並べる。店頭には、遠目にはぬいぐるみに見える白いリヤマ（ラクダ科の動物）の子のミイラが、販売用に数多く吊られている。店内には、儀式のお供えとして燃やしたり、家の新築時に地中に埋めるための小物が隙間なく陳列されている。漢方薬や強壮剤らしきモノも多種多様で、あやしげなモノはなんでもありといった感だ。

元イギリスの植民地であった北米アメリカ合衆国の首都ワシントンで、先住民であるアメリカインディアンの伝統的な暮らしのための用品販売店がひしめくことなど想像できない。北半球の先住民文化の壊滅とは真逆の、先住民文化の継承には一種の感慨を覚えた。



お供え物セット 中心にあるのはリヤマのミイラ

日本人移民

日本人移住資料館では、移民史を伝える資料が見られる。明治維新後の社会構造の変化によって失業や生活難に陥った人が現れ、日本政府が海外移住を積極的に進めた、と説明文がある。初期の集団移民先の多くはハワイや北アメリカだったが、一九〇〇年代に入り、日本政府が覇権主義を強めたため、警戒した北アメリカが日本人の移住を制限し、移住先は南米へと変わった。一九四一年までに二〇万人以上が南米に移住した。

第二次大戦後にも、日本政府は人口増加や食糧問題の解決を図るための国策として海外移住を促進した。移住者の多くは「日本よりたくさん稼げる」という宣伝文句を信じ、移住先での成功を夢見て海を渡った。

日本人が最初にボリビアに移住したのは一八九九年。入植当初は、各移住地は原生林が生い茂る不気味な密林の中にあり、ヒョウや大蛇などのどう猛な野生動物が潜む環境で、病気を媒介する大量の蚊に悩まされながら高さ三〇メートル、直径一メートルもの大木を切り倒し開拓を進める苦労があった。第一次移住者たちは、過酷な環境に絶望し、日本の新聞社や政党に対して「アメオオク、ミチナク、エイノウフカノウ」と後続移住者の送り出し中止を訴えたほどだったが移住政策は続いた。移民政策と言うよりも棄民政策というべきだろう。

政府が奨励することなど、無批判に受け入れてはならないことは、今も昔も変わらない。



南米移住推進ポスター

「社会局」とは今の厚労省